
ボーリング柱状図作成及びボーリングコア取扱い・保管

要領（案）・同解説の主な改定内容

1. ボーリングコアの保管・廃棄ルールの見直し

地質・土質調査では、ボーリングコアを長期間保管することによる保管スペースや管理コストの増大が課題となっていた。このため、これまで曖昧であったボーリングコアの保管・廃棄ルールを整理し、必要な工種のみ保管し、それ以外は納品後に原則廃棄する方針を明確化した。さらに二次利用も含めた利活用を踏まえ、電子納品データとしての保管に加え、「ボーリング柱状図」・「連続ボーリングコア写真」等を容易に閲覧可能な公開データベースを用いて保管・運用するものとした。

また、ボーリングコア、コア箱の廃棄は法令・条例に従って適切に行い、保管・廃棄を委託する場合は保管期間、保管料、処分費用を明確に定めて実施するものとした。

2. ボーリングコア関連の用語の見直し

ボーリングコアの保管・廃棄のルールの見直しに合わせ、関連用語の定義を整理した。

- オールコアボーリング：土質・地質の性状を連続的に把握することを目的としたボーリングで、採取したコアや標準貫入試験試料をコア箱に納め、コア観察により詳細な地質状況を把握し、ボーリング柱状図の作成が可能なものをいう。
- ノンコアボーリング：サンプリング、標準貫入試験、原位置試験など、個別の物性値取得、観測孔設置などを目的とした削孔で、コアを採取しないボーリング。

3. 連続ボーリングコア写真の仕様変更

連続ボーリングコア写真は、地質性状の把握に加えて、ボーリング柱状図の妥当性確認などのバックデータとしても有用であり、利活用の観点から、これまで曖昧であった仕様を標準化した。

用紙サイズは A4 縦置き、用紙 1 枚当たりに配置するコア箱は 5～6 箱程度を基本とした。コア写真を過度に縮小して 1 枚にまとめて納品するなど、閲覧性が低下していた課題への対応であり、適切な視認性と利活用性を確保するためのものである。

併せて、連続ボーリングコア写真のサンプルの充実を図った。

4. ボーリング柱状図様式の変更

ボーリング柱状図では、位置情報として経緯度情報を記入するが、これまで測地系の記入欄がなく、データ検定や利活用時に確認の手間や測地系の取り扱いなどが発生する可能性があった。これに対応するため、測地系の記入欄を新設した。併せて、使用する測地系

に、測地成果 2024 を追加した。

また、使用機種（試錐機、エンジン、ポンプ）の削除、標題欄の全体レイアウトの見直しなどを行った。

標準貫入試験については、JIS 改正に基づき、項目名称の変更（100mm 前後での打撃回数及び貫入量など）、記入欄の削除（50 回の貫入量など）を実施した。

5. 資格者の活用について

柱状図作成要領では、地質情報管理士の活用について推奨する旨の記載があるが、電子成果品の品質確保の観点から、その関与のあり方をより明確にする必要がある。このため、電子納品に当たっては、「地質情報管理士が行うか、地質情報管理士の指導の下に行う」旨を明確にする方向で改定を行う方針とした。

また、調査の信頼性担保の観点から、柱状図には調査責任者の氏名が記載されている。一方で、土質試験結果一覧表では整理担当者のみが記載されており、責任体制の明確化という観点から改善の余地がある。

土質試験結果一覧表において、整理担当者に加えて土質試験責任者の氏名も記載する方向で検討を行った。

あわせて、有資格者活用による品質確保の観点から、土質試験責任者については、有資格者（「技術士」、「地質調査技士」、「土質試験管理者」）であることを推奨する旨を追記する方針とした。

なお、土質試験責任者と整理担当者の役割については、土質試験責任者は土質試験全体を管理し、試験結果の品質確保に責任を有する者であり、整理担当者は土質試験の実施及び試験結果の整理を担う者として位置付ける。

以 上